

## フランス在外研究のご報告

人文学部准教授 平井靖史

2008年9月から一年間、大学での授業をお休みさせていただいて、在外研究員として、フランスはニースに滞在し、研究に専念する機会をいただいた。

ニース、というと観光リゾートというイメージが強いが、観光客が押し寄せて賑わうバカンスの時期（7, 8月）以外は、存外に閑静な街である。市の人口規模としては福岡市の半分くらいで、また、フランスは国の総人口も日本の半分くらい（約6千万）なため、相対的な位置づけとしては、フランスにおけるニースと、日本における福岡とはよく似たものであると言えるだろう。田舎過ぎず、都会過ぎず、産業と生活のバランスがほどよくとれた都市であると思う。到着したのがバカンス明けの9月だったこともあり、車道も歩道も広く、風通しのいい開放的な街という印象を当初から抱いていたのだが、実は、それはずっとシーズンオフだったからにすぎなかったことを、最後に思い知らされる形になった。残りの二ヶ月でハイ・シーズンを迎えると、街中が観光客でごった返し、渋滞の車から出る熱気が街を覆うようになり、あまりの混雑に辟易させられた。ちなみに「渋滞」というのはフランス語で *bouchon*（ブション）と言い、ワインの「栓」と同じ単語である。確かに、道路は栓をされたように流れなくなる。あらためてニースの人気を思い知らされた次第である。

ニース大学では、「思想史研究センター」に所属した。このセンターは、認識論、政治道徳哲学、美学、現象学を柱として、領域横断的に活発な活動をしているセンターで、各スタッフが専門的な研究を行っているのみならず、セミナーやコロク、勉強会などを開いてスタッフ間および学生との積極的な知的交流が図られている。充実した優秀なスタッフのうちには、私の専門とするフランスの哲学者アン

リ・ベルクソンを専門としつつ、現代のエピステモロジーの観点から科学哲学的な生命論への独創的なアプローチを試みているポール＝アントワヌ・ミケル氏をはじめとして、受け入れに際して骨を折っていただいたセンター長のキャロル・タロン＝ユゴン教授（美学）、私のもう一つの専門であるライブニッツと深い関わりのある中世哲学者アヴェロスの専門家であるアリ・バンマクルー教授、現象学では世界的権威と言っているジャン＝フランソワ・ラヴィーニュ教授、古代哲学の精緻な読解研究を重ねているエルザ・グラッソ教授などが名を連ね、この上なく刺激的な環境に身を置くことができた。

同研究所では、右も左もわからぬ到着当初から、所長や同僚の教授陣、そして秘書の方を含め、時には入国にまつわる様々な手続き上の問題でお手を煩わせたにも関わらず、たいへん暖かく迎え入れていただき、感謝の念に堪えない。研究室や図書館の利用でも便宜を図っていただいたおかげで、申し分ない研究環境を得られたと思う。学外の研究会や、公開講演会など学問的な面ばかりでなく、ご自宅での食事に招いていただいたり（お返しでお招きしたり）、家族ぐるみで一緒に外出したりなど、かけがえのない経験も数多く得ることができた。

授業もいくつか聴講させてもらったが、各スタッフの講義スタイルはもちろん異なるものの、総じて、日本における講義と比べて、講義内容の水準が高いにもかかわらず、領域に対しては自由度が高く（いわゆる「たこつぼ」化しない）、柔軟性の高い知的風土が感じられた。この点は、単に狭義の哲学の問題だけではなく、言語の問題も大きく関与していると思う。日本では、知っての通り、各分野・各個別学問に応じて、欧米語では同じ術語が別様に訳され用いられていることがしばしばある。これは、一方で、同じ語の異なる含意を排除してピンポイントで

意味を同定できるという利点を持ちはするものの、他方で、異なる分野間の交通の不便をもたらす。それが、研究者あるいは学生にとって、さまざまな分野に通底する大きな思想・観念の脈絡というものを把握させにくくしているのではないかと思える。実際、日本では、哲学と他の分野の間のみならず、哲学の中でも、たとえば古代哲学の研究者と近代哲学の研究者の間では、語彙や言い回しに（ひいては文法にも！）断絶が見られることがある。これに対して、フランス語は、新語の生成に（制度的な）制約があることもあり、全体の語彙数がほかの欧米語と比べても極端に少ないのが特徴である。このことが、各学問分野の間の垣根を低くしているということはあるのかもしれない。

例を一つ挙げると、ライプニッツの用いる「知覚 perception」という言葉があるのだが、この語は日本の哲学界では、（通常は別の単語 *représentation* の訳語として用いられている）「表象」の語によって訳すことが通例になっている。しかしこの同じ perception という語は、ライプニッツが同時代に知的に格闘した、ロックやデカルトといった大哲学者によっても当然用いられており、そしてそれらの訳書では一般に「知覚」と訳されているのである。もちろん、同じ perception の語を用いつつ、彼らはそれぞれに異なるニュアンスをそれに与えているわけであるが、しかしそれは言ってみれば概念的探究の副産物として当然の結果である。しかしながら、「語」としては同じものであってくれなければ、そうした概念的な違いを見極めることにすら手をつけられないではないか。

もちろん、公平を期すために付け加えるならば、このように訳された経緯についてはれっきとした解釈上の理由がある。つまり、ライプニッツの言う知覚は、他の哲学者と異なり「外的対象」を想定しない。そこから、「知覚」よりも「表象」を採用することになったのである（だがそうすると今度は、perception を心理化しすぎると私には思われる）。

ただし、言うまでもないことであるが、もちろん、このことは単に言語の問題だけで説明されるべきことではない。たとえば、フランスにいて強く感じたことは、各学問分野の間のみならず、学者と一般の

人々の中の知的断絶の度合いもまた低いということである。

実際、ニース大学の同僚が講演をするというので聴講に出かけた美術館での公開講座では、会場に訪れた一般の方々から、矢継ぎ早に高度な質疑が飛び出し、専門家と対等な議論を交わしている様を見て、日本における状況と引き比べつつ多少暗澹たる気分になった。

このことは、広い意味での導入教育に関係していると思う。時に、日本では「新書」が特別な役割を果たしており、専門研究者と一般の人々の橋渡しを行っているが、フランスではそういうことはなく、エリートと労働者階級の間での断絶は埋めがたいということが言われることがある。この指摘は、一面では正しいが、補足が必要である。確かに、知的関心を持たない傾向を持つ人々が一定数存在することはあるだろう。だがそれはフランスに限ったことではないではない。むしろ、そうした限られた人々を別にしても、圧倒的な量の潜在的読者層が存在するのであり、彼らに対して提供される知的題材の質が問題なのである。

実際には、フランスの書店に行けばわかることだが、入門・導入書のたぐいは豊富に存在する。そしてそれらの装丁が大変洒落ている。さすがフランスである（しかし、このことは実践的には思ったより重要なことではないだろうか。実際、知的領域への関心は、はじめは、「そうしたものに関心を持つ自分」という一種の見栄から始まることも少なくないからである）。そうした「入門書」を手にとってすぐに気づくことは、本のうちに、いわゆる「専門書」（哲学の場合はオリジナルの哲学書）へと読者を導く無数の仕掛けが設けられているということである。もちろん日本の新書にも、巻末に参考文献表はついているのだが、きっと目を通しさえしない多くの読者が存在するのではないか。あるいは、仮に本文の中で、特定のオリジナル文献への言及があったとしても、そこでなされる執筆者による解説で事は済ませ、自ら当たろうなどと考える人はそれこそ「研究者」以外にはまれなのではないだろうか。

また、書物に触れる機会もまた重要である。駅のキオスクで（！）購入した科学雑誌（日本で言う「ニュートン」に相当）には、記事に多くの注がつ

いており、単に解説をわかりやすくしているだけではなく、そこから専門書へと自然に誘われるようになっている（ちなみにこの雑誌は食料品スーパー付属の雑誌コーナーにも見つけられた）。バーガーショップで子供用に注文したセットには、（日本同様さしてかわいくもないプラスチックのおもちやがついてくることもあったが）、たとえば「南極」をテーマにしたクイズブックがついており、これが大変専門的な内容で、巻末の解説で大人がまず勉強しなければ子供に答えられないという仕立てになっていた。最新の科学説を国民に広めるには、子供経由が効率がいいというアイデアであろう。こうしたことがらは、単に言語や教育水準の問題ではなく、出版業界の都合や、景気、販売ルートなど様々な要因が関わっており、単純にまねをすればいいという問題ではないのは当然であるが、いろいろと考えさせられるのも事実である。

フランスには、これまでも学会や旅行などで何度も行ってはいるが、やはり住んでみて初めてわかることが多かった。今回の滞在で、改めて思いを強くしたのは、フランスは哲学の国だということである。フランスでは高校で、文系はもちろん、理系でも哲学が必修という。つまり、高校を出たすべての人にとって、哲学というのはある程度（まじめに勉強したかどうかの違いはあるにしても）なじみの学問なわけである。じっさい、哲学科以外の学生や一般の人々に哲学の話題を持ちかけてみると、話の通じやすさがずいぶん違うという印象を受ける。大学に入って教養で運良く（運悪く？）「哲学」をとるまで、哲学に触れる機会がほとんどないという日本の環境とはずいぶん違う。もちろん、フランス人にとっても「哲学＝難しい」というイメージはあるようだが、一人の人間として様々な問題を受け止め、考えていくための方法論として是非踏まえておくべきものという理解は一致してみられるようで、哲学の価値が軽んじられる傾向にある日本で哲学をやっている身としては、つくづくうらやましく感じた。学会などで行くと、当たり前のように周りは専門家なので、とくに哲学を専門としない人々と話す機会というのはなかなかないわけだが、今回は一年住んでみて、フランス社会全体の中で哲学が持っている位置

づけのようなものを、断片的にでも感じられたのは大きな収穫であった。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えていただいた福岡大学の関係の方々に、心から感謝いたします。ありがとうございました。



## シュトゥットガルトで過ごした1年

工学部准教授 岩村 誠人

2008年9月から翌年8月までの1年間、在外研究の機会を頂き、ドイツ・シュトゥットガルト大学計算力学研究所（ITM）にて研鑽させて頂きました。共同研究や授業参加、セミナーでの講演など充実した時間を過ごすことができました。

シュトゥットガルトは、ドイツ南西部のバーデン・ヴュルテンベルク州の州都で、ダイムラー、ポルシェ、ボッシュなどの本社が置かれているドイツを代表する工業都市です。1886年1月29日に、カール・ベンツが世界で最初に「ガソリンエンジン駆動による車両」を開発した（特許を取得した）自動車誕生の地であり、機械工学分野の人にとっては聖地のようなところの一つです。シュトゥットガルトたちもそのことを誇りに思っており、中央駅の時計塔の上には大きなベンツマーク（スリーポイントスター）が誇らしげに回転しています。

シュトゥットガルト大学は、1829年に機械、建築、土木、化学の4分野からなる工科大学として創立され、現在では14学部140学科2万人以上の学生を擁するドイツでも有数の総合大学です。キャンパスは中央駅に近い市街地と郊外の2か所に分散していますが、私が滞在した研究所は長閑な緑の多い郊外のキャンパスにありました。

今回お世話になりましたITMは、マルチボディダイナミクスと車両動力学の分野で優れた業績をあげている機械動力学の分野では非常に有名な研究所です。スタッフは、教授3名、助手1名、Diplom取得後、博士号取得を目指す20代後半の若手職員19名と大所帯ですが、シュトゥットガルト大学の研究所の中ではこれでも小規模な方とのことでした。職員はドイツ人以外に、ブラジル、ヨルダン、中国、スペイン、チュニジアと国際色豊かで、それに私のような客員研究員も常に数名受け入れており、とても刺激的な環境でした。

ITMでの指導教授のシーレン（W.Schiehlen）先生は、マルチボディダイナミクスの世界的権威であり、力学の基礎理論への本質的な貢献から自動車、鉄道、ロボット、航空宇宙などへの応用まで幅広い分野で先駆的な業績をあげられ、グランペール賞他多数の賞を受賞しておられます。また、理論応用力学連合（IUTAM）の会長や有名学術雑誌のチーフエディター他、シュトゥットガルト大学の要職も長年務めてこられました。2002年に定年退官され、ITMの所長を弟子のエバーハート（P.Eberhard）先生に譲られましたが、現在も名誉教授として引き継ぎ、精力的に研究教育活動を行っておられます。

シーレン先生は、非常にご多忙であるにも関わらず、私のために週2回ミーティングの時間を設けて下さいました。この指導の時間は私にとって身の引き締まる思いの時間であり、先生の一挙手一投足からさえ何かを学ぼうと必死でした。慣れない環境に加え言葉の問題もあり、準備は大変でしたが、シーレン先生はいつも「Super! Prima! (すばらしい!)」などと大袈裟に励ましてくださり、お調子者の私はすっかり乗せられて、気がつけば1年間で3編の論文を書きあげることができました。シーレン先生と共著の論文を作成することができたことは、私にとって大きな自信になりました。シーレン先生はまたプライベートでも、私と妻をしばしばご自宅に招いてくださって奥様の手作りのケーキやドイツの家庭料理をふるまって下さったり、近郊の町にドライブに連れて行って下さったり（シーレン先生は御年71才ですが、アウトバーンを200km/h以上で走行されていました）とても親切にしてくださいました。このようなシーレン先生の優しさ、公私にわたる親身なご指導は、私にとって生涯忘れられないほど感動するものでしたし、研究教育の本質を少しでも学ぶことができた気がします。

さて、ドイツではいま大学改革が進められていますが、シュトゥットガルト大学でも大きな転換期を迎えていました。1999年に採択されたボローニャ宣言により、2010年までに従来のDiplom・Magisterなどの伝統的な学位取得コースからBachelor/Masterのコースに移行する必要があるため、カリキュラムの大幅な改編が行われていました。また、改革の目玉として有能な若手研究者に教授と同等の資格を与えるユニオア・プロフェッサー制度が導入され、私の滞在中にも30代の若い教授が誕生していました。ドイツの国立大学ではこれまで「誰もが等しく平等に教育を受ける権利がある」という考えのもとで原則として授業料無料を通してきましたが、財政危機等のあおりでこの制度も見直され、シュトゥットガルト大学でも1 Semester-500ユーロの授業料を徴収し始めていました。

このドイツ滞在中で私が最も素晴らしいと感じたことの一つは研究所の若手職員たちとの友情・交流でした。彼らの多くは私よりも10歳近く年少でしたが、よくいわれますように東洋人は若く見えるようで、こんなメタボで薄毛が少し気になりはじめた私でも同じ年のように親しい友人付き合いをすることができました。彼らとは、学生食堂と一緒に昼食に行った時やお茶の時間、仕事の合間などに色々なことを

語り合いました。秋には有名なカンシュタッター・フォルクスフェスト（ビール祭り）に皆で出かけて行って泥酔し、冬には幻想的なクリスマスマーケットの厳寒の中でグリューワインにほろ酔い、春には陽気なフリーリング・フェスト（ビール祭り）でまた酔いつぶれました。一緒にフットサルをしたり、サッカー・ブンデスリーガ1部の VfB Stuttgart の試合を観に行き熱狂したりもしました。個人的に自宅に招待されたり、ホームパーティーやバーベキューに誘われたりすることもしばしばでした。彼らは研究に対しては極めて熱心でしたが、常にユーモアを忘れず、ゆとりを持って楽しみながら生活をしているのが印象的でした。彼らとの交流を通してドイツ人のものの考え方や価値観、文化について知ることができました。

光陰矢のごとし。シュトゥットガルトでの1年間はあっという間に過ぎ去ってしまいました。ドイツの歴史と伝統と学問の香りが漂う雰囲気の中で、色々なことを考え、感じた1年でした。この1年間で修練したことを、今後の教育・研究に反映させていけるように努力を重ねてまいりたいと思います。

最後になりましたが、在外研究の機会を与えて下さった福岡大学、工学部教授会、国内外でサポートして下さい下さった方々に心よりお礼を申し上げます。



ベンツ1号機



シュトゥットガルト中央駅



シーレン先生のご自宅にて



ビール祭り



クリスマスマーケット



シュトゥットガルトの街並み